

---

# v i v i d って何だろう？

餅っち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

vi vidって何だろう?

### 【Zコード】

Z3062Z

### 【作者名】

餅つち

### 【あらすじ】

私が今連載中のI.SのSSの主人公の弾がもしもリリカルなのは世界に転生していたらという、ある意味IFのお話です。 息抜き＆電波受信MAX状態&I.S本編優先のため、更新は遅めというか、そんな状況です。

そして、駄文ですが、それでも構わない!と言つ方はどうぞ。  
最新話で行つてゐるアンケートですが、締め切りました!

結果は活動報告に載せてますので、ご覧いただければ幸いです。

# 第1話 原作から逃げ切る「」が出来るのだ（ドヤード）……と考えてこのまま

輪廻転生。

いきなりなんのこいつちや？ と言いたくなるだろ？

俺だつて見ず知らずの人間からいきなりこんな事を言われたら、まあ、なんだな引くな。

そんな言葉、輪廻転生というものを俺は体験した。  
一次創作とかＳＳとか言われている奴で言われている【神様転生】  
つて奴だな。

まあ詳細は割愛するけれど、イロイロな特典貰つた俺は転生したんだよ。

神様（おっぱおの大きい女神様でした。あのマシュマロの感触は今でも覚えます……）が言つていたある世界に転生したはずなんだが、生まれて今現在8年の月日が流れている。

因みに、この世界について大体の予想がついたのは四歳辺りの頃だつたかね、ミッドチルダ、んでもってベルカ、…… といふ二つの地名。

そして、俺が住んでいるのはミッドチルダとベルカの間にある都市。

もしかして、あの、お話と書いて【全力砲撃でブツ飛ばす！】  
という恐ろしい魔王様が大活躍するリリカルで、なのはな世界じゃあるまいな！？

そんなことを考えながら俺、ひと【ダン・ゴタンダ】はst魔法学院小等部に入学したのだった。

無論のこと、今いるこの世界が魔王様達が活躍する時代でないことを切に祈りながらな……

もちのろん、俺の夢い希望は打ち砕かれたのは言うまでもない、え、どうしてかつて？ 新聞に載っていたからだよ。エース・オブ・エースこと、高町なのはを含めた原作三人娘の写真がな……

普通に田立たないようには過ぎていれば、なにも、何も問題よね！

原作に確実に巻き込まれる呪いも特典でつけた、とかあの女神は戯言を言っていたけど、俺の方から原作キャラと言つ存在から、後ろに向かって全力ダッシュすれば問題ないよね！――

「……？ セツキから、変な顔をしてますが、どうかしたんですか？」

「ああ、いや、なんでもない、なんでもないぞアインハルト」

「そうですか」

なんて考えながら、教室で一人で百面相をしていたからだろうか、目の前にいる地球の日本で言う所の幼稚園に入る前からの付き合いの幼馴染と言うか、腐れ縁の【AINHARDT・ストラトス】が疑問の色を浮かべた顔で問いかけてくる。

なんか、AINHARDTとの付き合いが始まってから思つのは、とつくなじんでいるという感覚なんだが、気のせいだろうか？ 原作は第一期までしか知らないから、なあ。

まあ、良いか。

なんて考へるのだった。

「vidつて何だらう？」

「第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ（ドヤア）……と考  
えていた内は幸せだつた」

小等部に入学してから、三年と言う時間が経過しているんだが、俺の友達と言うか、付き合いのある人間はAINNHALTしかいなかつたりする。

俺自身の精神年齢が前世と合わせて二十代前半と言えることなどからか、小さい子供達と会話の波長と言つか話題が合わなかつたんだよなあ。

その上に転生特典で貰つた能力とかの鍛錬もあつたことで、余計に俺の周囲からはAINNHALT以外の人間が近付かなくなつていつた。

と言つのもあるな、この時期はやつぱり自分とよく遊んだりとか、近い精神の連中とでつむ事が多いからな。

それも影響したんだろう、何時の間にやら俺はいつも登下校をAINNHALTと共に過ごし、学校内でも彼女と一緒にずっと過ごしていた。

「あ、AINNHALT、今日も家で晩飯を食つていくか

「はい、厳さんに呼ばれますし、『迷惑じやなかつたら、ですけど……』

「んじゃ、決まりだな」

「はい、今日もお世話になります」

「や」まで気にしなくても良いこと思つんだけどな

その上にだ、どうもAINHARDの両親と家の両親と祖父さんが知つてゐるもの同士のようで、彼女の両親は仕事の都合からか良く家を空けるために、日本の定食屋ともいづべき店をやつてゐる家でAINHARDは晩飯を食つていくんだよな。

まあ、何故かAINHARDも店を手伝う、とか言つて今では看板娘のような感じになつてゐるから、店にとつてはありがたいんだけどな。

ただ、あの爺の強さだけは納得がいかない…… どうして「A.S」の魔導士を生身で、魔法を使つこともなく一方的に凹れるのだろうか。

相手は犯罪を犯して逃走中の魔導士だつたんだが…… 見てゐるこつちが辛くなるほどの一方向なジエノサイド・ゲームだつたのには、かなり驚かされた。

それはそれとして、俺は律儀と言つかなんと言つたか、と言つた具合のAINHARDには苦笑を禁じえないのだった。

こいつはかなりしつかりとした教育と言つたか、そんな感じのことを受けた所為だらうか、いつも丁寧な言葉で喋るし、受けた恩は毎回キッチリと返す奴だ。

「そんな訳にはいきません、ダンのお爺様には大変お世話になつてますから」

「爺さんも母さん達も氣にするなつて言つてんの、頑固な奴だよお前は」

「頑固で結構ですよ…… それに受けた恩をそのままにしていたら、ダンと同じ所に、あなたの隣に立てないじやないですか……」

「マイツの頑固さは折り紙付だ、なにしろ俺の名前を呼び捨てにしてくれたのも最近だしな。

「アインハルトとの馴れ初めだつて？ まあ、それは後で語るとするさ、長くなるし何より、詰んでしまつた氣がする感じが強まるからな。

「ただ、小声で言つた何かが良くなかったんだが、何を言つたんだろうか？ 聞いてしまつたら取り返しのつかないことになりそうでもあるから、気にしないことにしよう。」

そんなこんなで、俺の家に着いた後、アインハルトと俺は店にプロンをつけて出て行くのだった。  
さてと、これからは戦場だ！！

「ダン！5番と4番のテーブルにこれを運べ！」

「了解！！」

今は夜の18時である。

立派な夕食時といえる時間帯、それは我が家」と【五反田食堂】も例外ではない。

席は全て一杯に埋まり、カウンター席も同様である。

そんな中で、俺とアインハルトは料理の配膳とメニュー取りに忙し！といった具合に働いているのだった。

「（注文を繰り返します、業火野菜炒め定食がお一つ、カレイの煮つけ定食がお一つの以上二つでよろしかつたでしょうか？」

『大丈夫よ、今日も精が出るわね、AINHARDちゃん!』

「ありがとうござります」

笑顔はぎこちないながらも注文をキッチリと取るAINHARDの姿は、五反田食堂の一種の名物と言うか、そんな感じにもなつたりする。

何しろ恐らくだが、AINHARDの客が何人かいるしな、まあ、今はもう一人、俺の実の妹も店を手伝っているからな、妹の当ての客もいるんだりさ。

見た目は美少女で尚且つ、クールビューティーと言える外見なんだしな、人気が出ないほうがおかしい。  
幼馴染補正を抜いて、しかも小学生だから、将来は無茶苦茶なレベルの美人になるのは間違いないだろうな。

まあ、それもあるが今の俺の体勢を見物したい客も多いけどな、何しろ。

「4番テーブルかぼちゃの煮つけ定食と焼き魚とフライの盛り合わせ定食に業火野菜炒め定食お待ち!...」

『いや～やつぱダンくんのこの姿を見ないと、ここで食つてる気にならないな!』

『だよな、両手に一つずつに両肩と両肘にまで皿を乗せて運ぶ姿を見ないとな』

「5番テーブルカツどん定食と天丼定食にカレイの煮付け定食お待ち！」

『お、ダンくん精が出るな！』

『相変わらず変わった運び方って言うか、すげえ運び方するよな』

お客様の一人が言っていた通り、俺の体勢はと言うと両手、両肘、両肩に一つずつのメニューを載せて運んでいるのだよ。え、どうしてできるのかって？ 慣れだよ、慣れ。

人間、死ぬ気でやりやあ何でもできるもんさあ。

それに身体能力も常人からかけ離れていることだしな、それが原因でもあるだろう。

だけど…… アインハルトの身体能力も同じ様に感じるのは気のせいだろうか？ それに将来、俺が彼女に捕まるイメージも浮かぶのは、気のせいだと思いたいなあ！！

その後は、まあいつも通りに俺とアインハルトは爺さん作の夕食を食つて、俺が彼女を家まで送り。

俺は家に帰つて寝ていたんだが次の日は管理局の後悔意見陳述……なんだつけ？ 公務員にしては珍しいといつかなんと言つか、と考えたもんだ。

何しろ、後悔、という言葉が入つていたんだし。

配られたプリントは見ていないし、年老いた爺さん教師の言葉だけしか聞いていなかつたし、ニュースも見なかつたからな、なんかその後に起こつた事件が原因で、その日から夏休み並みの長期の休みになつたというくらいしか聞いていなかつたんだけど。

それから数日後、俺は寝惚け眼で自分の部屋のカーテンを開けると、そこには。

「……………なんぞ？ あのでつかい空中戦艦……………？」

何か知らんが、でつかい空中戦艦が浮かんでいました！！

周囲には変な光が光つたり消えたりしていることから、管理局の艦でないことは明らか、恐らくはなんかの敵対している勢力のものなんだろうが。

そのまま起きていたら、面倒なことになりそうな予感を感じたの

で、俺は……

「寝

と叫つてドアのなかに入るのだった。  
だが。

「オラア……何を寝てこせがるダン……」

「じ、爺さん……?」

「街中に妙な機械が現れて皆が戦つてゐるのに、手前はアイ  
ンハルトちゃんを守りにもいかねつてのかい!?」

「いや、は？ そんな機械が街中を襲つてるのかよ？」

「四の五の言つてねえでさあとの娘を迎えて、一緒に避  
難しろ……！」

そういつて窓から追い出される俺、つていつか田の前に変な円筒  
状の物体がいるんですが……？

その変な機械、後から知つたら【ガジエット？型】と呼ばれてい

たそれが、レンズの部分から放つて来たレーザーを全て俺は。

全弾を空中で回避した。

「なんだよ、つたぐ！」

爺さんにわけも分らずに叩き出され、まだ眠い俺、目の前にいるのは良いストレス発散対象、そう俺の脳は認識して一瞬で俺は変な機械に肉薄し。

「詠唱はなんぞ覚えちゃいないが、雷の暴風……モドキー……」

イライラと全ての怒りが乗つた一撃を放つたんだが…… あ、やべ、やつすぎた……

何しろ、俺よりも少し上を飛んでいた機械と、その群れを消滅させただけに飽き足らず、でっかい空中戦艦の推進部と思しき部分に

火柱が……

上昇するスピードがちょこっと、心持ち落ちたような気配を感じた後、冷静となつた俺が取つた行動は。

「うん、AINHARDTと一緒に避難するか」

だつた。

無論のこと、俺は自分自身の魔力を隠蔽して、AINHARDTを探していたけどな。

その後の顛末を語ると、簡単だ。

家でフルフルと恐怖で震えていたAINHARDTを保護して、一緒に避難所に駆け込んで保護してもらおうとした時に、襲い掛かってきた機械数体をなんでもありの卑怯な戦法で撃退、なんかAINHARDTに変な目で見られつつも、避難所にたどり着いて保護してもらう。

その後は、機動六課、だつたけ？ の活躍で空中戦艦は撃沈され  
て終了！

といった具合だつたようだ。

ただし、どうも、空中戦艦に1撃を与えた魔導士のことが気になつたらしく、暫くの間、ピンクのポーネテールの巨乳なバトルジヤ

ンキーの女性や、赤い髪を持つた、かなり気の強いロリッ娘、などが俺の家がある周囲をうろついていたんだが、ロリッ娘と知り合つた以外は何もないと言いたい。

まあ、鉄槌の騎士ヴィータと烈火の将シグナムなんだが…… 気づかれてないよな？ 気付かれてないよね？

なんて考えて、俺はベッドの中でブルブルと震える日々を過ごすのだった。

## 第1話 原作から逃げ切るJリヒが出来るのだ（ドヤド）……と考えてこられる方は是非

このJリヒのダンは基本的にTWS本編のダンと見た目は一緒です。

後は基本的なスペックも同等ですが、年齢などによる弱体化もありますが、あまり本人は気にしていなかつたり……

ただ、今は魔王様の砲撃怖い、と言つのが心境を埋め尽くしております。

後は、舞台となつてゐる第四期の原作知識が無い、といつのがありますね。

なのでアインハルトが主人公であるのに、彼女と幼馴染と言う関係になつちゃつた彼、どう転んでいくのかは、作者にも分かりません！

## 第2話 おねこちゃんと戻るの最高ですー一年下は愛でるの、タチ

何か変な状態なんだろ？か、数時間程度で、一気に執筆できた……

## 第2話 おねいさんと戻まれるハートは最高でっすー一年下は愛でんなー、タチ

あの変な空中戦艦浮上事件から4年の歳月が流れ、俺達はセヒルデ魔法学園中等部に進学していた。

え、俺とアインハルトの関係つて？ いつもどおりさ、ただ……俺が好みのタイプの女性とかをグフフとばかりに見ていたら、機嫌が急降下＆制裁を加え始めてきたのが最近の悩みだ。

確かにアインハルトは将来有望だ、間違いなく将来は臣とはいかずとも美といえるくらいの乳をもつてているのは確実……

だけど如何せん、俺とアイツはちうがくせい、そう、まだアインハルトのスタイルは微な状況なんだよな。

だからアインハルトをそつこいつ田じや見れないし、何よりも、あの時の空中戦艦の事件の時に涙を流して震えていた彼女の姿を見れば、まあ、将来的にもあんまりエロい田じや見れないなあ。

ぬつ！？ あのおねいさん戦闘力Gクラスだと！？ ええい、もう少し俺が歳を重ねていれイデテエ！……

「ダン、何を見ているのですか？」

「い、イエ、何も……」

一体何時、彼女は俺の視線が他の女性へと向けられて、しかも口い物を含んだものに変わったことを知ったのだろうか。

金髪で黒い何処かの制服を着たおねいさんに声を掛けるべきかどうか迷った瞬間に、俺の脇腹に走る鋭い痛み。

見れば、アインハルトが目が全く笑っていない微笑で俺を見ていた。

……なんか危険と言つたか、そんなものをそこはかとなく感じるのは、気のせいだろうか？

まあ、それはそれとして。

「と、所でだ、アインハルト」

「何でじょうか？」

「今日何がするんだ？」

「そう、ですね…… 今日は、その、遠慮させてもいいですか？」

「分った、爺さん達には伝えておくな

「はい、お願いします、あと…… 明日はお邪魔させてもいいりますから、そう、伝えてもらいますか？」

最近、といつか。

去年辺りからアインハルトは、家で晩飯を食つ回数が減つたのだ。

理由は分らないが何かを彼女が隠している気配がある。だけど、彼女が言わないから俺は何も聞かない事にしているが、聞いた方が良いのだろうか。

なんて考えていたら、彼女の家に着いた。

「では、ダン、また明日」

「おひ、後、アインハルト」

「……？ なんでしょう」

「夜に出かけることとかあつたら、気をつけろよ、最近連續傷害事件なんて、物騒なこともあるみたいだし」

「……………はい」

被害届こそ出でていないし、噂程度でしか聞いた事ないけど、最近、物騒なことが相次いでいるからな。

その上での忠告と言うか、そんな感じのことだつたんだけビ、一瞬彼女の顔が強張つたのはどういうことだつつか？

まあ、アインハルトが例のあれの加害者つて言つわけじゃないだ

ろうじ、俺の気の所為かね。

一瞬彼女の顔からは、隠し事がばれそうになつた時のアインハルトの様子と同じものが表情に浮かんだんだが。

まあ、良いか。

後に、俺はこの時の判断を後悔することになる。

原作に関わることになつちまつた！って意味で。

いつもと同じ帰り道、私はたった一人の友達であり、幼馴染、そして一番大切な人のダンと一緒に帰っていた。  
年月が経つほどに分つたのが、ダンがとっても【エッチ】だと言うことです。

思うように成長してくれない私の体、スタイルもまだまだで、よく彼のお店に来る様々な女性達のスタイルとは私のスタイルは比べられない。

「…… 武装形態と読んでいる私の姿は、あんなにスタイルが良いのにどうして…… なんて考えもある。

だけど、いつの間にか彼は管理局の執務官の制服を着た、とても綺麗な金色の髪を持つた非常にスタイルの良い女性を、いやらしい目つきで見ていた。

それと同時に沸き起こる私の胸の内の感情。  
私はその感情に心当たりはついている。

嫉妬、それだ。

私が隣にいるのに、どうして彼はすぐに他の女性に田移りするの  
だろうか。

私だけを見て欲しいのに。

この気持ちに気がついたのは、4年前の事件の時に、彼に助けて  
もらつた時だつた。

その前からも似た気持ちはあつた、いつも一緒に過ごしていた彼、  
こんな暗い性格で虹彩異色という瞳まで持つた私、同じくらいの年  
の子達からは格好のイジメと言つた、そんな対象になつていたとき  
に彼だけが私の傍にいてくれた。

私は特殊な生まれで、先祖の記憶が時々夜に蘇つたりして、眠れ  
ない時が合つたりした。

その時に彼は決まって私に連絡をしてきてくれて、泣いている私  
を安心させてくれた。

心の奥底に抱いていた感情が、ただの幼馴染から大切な男の子に  
変わるために時間は掛からなかつた。

でも、あの事件の時に私は無力さも味わつてしまつ。

彼が助けに来てくれなかつたら、私は、あの日、命はなかつただらうから。

外の様子がおかしくて疑問に思つて外に出た私は、燃えている町や破壊されている建物を見て、恐怖という感情に支配されてしまつたのだ。

そして、私は変な機械に【ガジエット】と呼ばれている機械によつて、命を奪われそうになつた瞬間。

『俺の大事な幼馴染に手を出すんじゃねえ！』

そういうつて私を颯爽と助けてくれた彼、その時に、私は彼の事が本当に好きになつてしまつたんだろう。

それからも数体の機械に襲われたのに、彼が全部蹴散らして（アインハルトの乙女補正が入つておりますので、ダンが横島並みの卑怯な手段を講じてガジエットを撃墜した瞬間の映像は削除されたりします）くれて、避難所まで無事にたどり着けたのだから。

それから私は、それまであまり真剣に修め様としなかつた霸王の武術を修める事を決意した。

彼の家で、夕食をあまり一緒に食べなくなつたりしたけれど、でも、彼の隣にいたいという思いで私は今も耐える。

私は彼を守れて、彼も私を守ってくれるつゝ言ひ対等な立場に、  
私は居たいのだから。

ただ、貴方は……夜にストリートファイトを行つて、人に迷惑  
を掛けた私を、どう思いますか？  
そう思つてしまつた。

それでもつて夜になり。

俺はいつものように店に出るのだった。

「ひんばんは、ダンくん

「お、ギンガをひじやん、ひつじやいー」

とつぐに晩飯時は終わって、客が引いた時間帯を見計らつたようになってきたのは【ギンガ・ナカジマ】さんとこうとつても綺麗で、素晴らしいスタイルを持つおねいさんである…！

相変わらず素晴らしい乳です…！ぐへへへへえ…！

と言いたくなる気持ちと緩みになる表情を俺は、気合で抑えながら彼女の元に注文をとりにいく。

いつもは妹さんのスバルさんを含めた他の妹さんたち、親父さんであるゲンヤさん達一緒に居るんだけど、たまにギンガさんが一人でここに来るんだよな。

ただ、彼女達が来るときは、偶然か決まってアインハルトがいい日なのが気になる……まるで、何かの修正を受けている感じのような……

き、気のせいだよね？ 彼女達も原作キャラだ！とかなんて……

「注文はなんつすか？」

「それじゃあ、いつもの業火野菜炒め、ナカジマ盛りでお願いできるかしら…」

「了解つす、ナカジマ盛りつすね

ギンガさんの注文を確認後、俺は爺さんに注文を伝えるんだけど、ここでナカジマ盛りについて説明しておこうと思つ。

ギンガさんを含めたナカジマのお嬢さんたちは健啖家といつ言葉が、裸足で逃げ出すくらいに食つんだよ。

最初に見たときは流石に引いた。

何しろ業火野菜炒めを10人前を普通に平らげた上に、スイーツを食べに行こうとか普通に会話していたんだから。

その時のケンヤさんの表情は形容しがたい、複雑なものだつたんだけど、そりやそつだろつ。

自分の娘が、外食して普通にとんでもない量を食つているんだしな。

それから、ナカジマの皆さんが家を良く利用してくれる「」贋原さんになつてくれたので、爺さんがナカジマ盛りなるものを作つたのだ。

量が単純に10人前の業火野菜炒めにカレイの煮付け、かぼちゃの煮つけの各種定食なんだが、爺さんもどこで10人前の量を盛り付けることが出来る皿を見つけてきたんだか……

そんなこんなで、表のメニューには載つていない裏の注文でもあるナカジマ盛り、なんて物ができたのだ。

お客様がギンガさん以外は居ない状況で、彼女がちょいちょいと手招きしているので近寄ると、彼女の横の椅子をポンポンと叩いたので隣に座る。

「うーん、やっぱり大きくなつたね」

「そうつすかね？」

「うん、つい2、3年くらいまでは膝の上に乗せれるくらいだったのに、今は私に背が追い付きそつじやない」

「今でも大歓迎です」

「クスクス、『コラ、この甘えん坊さん』

うん、まあ、なんだ？ 照れる。

彼女の顔は弟の成長を喜ぶ姉、と言つた様子で、俺の頭をかいぐりかいぐりと撫でてくるんだから。

爺さんやお袋に親父達は微笑ましい物を見る感じで、見守るばかりで何もしてくれない。

照れを誤魔化す代わりに俺は、言つているんだけど、彼女は俺の額にこつんと拳を当てて、くすくす笑つてゐるのだった。

「ダン、出来たぞ、ギンガの嬢ちゃんの所に持つていつてやれ！」

「あいよー！」

「ヤーヤとした笑みを浮かべる爺さんが、常識ではまず考えられない量が盛られた野菜炒めを完成させる。

それから俺は、まだ頭を撫でてくるギンガさんから逃れてから、危なげなく皿を持つが、ずつしりとした重さに見ただけで腹が満たされるこの感覚、何時になつても慣れない。

だけど、ゲンヤさんはいつもこれを味わっているんだよなあ。なんて考えるけど、なれたんだろうなあ、とも同時に考える。

「業火野菜炒め、ナカジマ盛りお待ちます!—」

「ありがとう」

それから俺はギンガさんにそれを届け、カウンター内に戻る。

「オイ、ダン」

「なに?」

「お前もギンガの嬢ちゃんと一緒に食つちまいか、ついでに用意したいた」

「お、ありがとう」

戻ってきた俺をいきなり爺さんが声を掛けてくるので、俺は疑問顔で爺さんを見上げる。

爺さんが、俺に定食に使つ盆を渡してきたから、受け取ると視線を感じる。

俺はそつちの方をチラリ、と見れば。

笑顔のギンガさんが手招きしているのだった。

そして、爺さんを見れば、一ヤ一ヤとしているので、恐いくは【可愛がられながら食つて來い】とでも言いたいのだろうか。え、俺の選択つて？ 決まってるじゃないか！？

「ギンガさん俺も晩飯なんですが、一緒に食つて良いですか！？」

美人のおねいさんに可愛がつてもらえるならば、どんな食事でもバラダイスだ！！

こういう時はまだ押さないことに感謝できる！…おねいさんにセクハラまがいのことをしても、笑つて許してくれるんだしぁフフフ…

それから俺は、ギンガさんと一緒に楽しい食事をした後、鍛錬といつか能力を使いこなす為の訓練を行う。

その後で、風呂に入つて部屋に戻つたときに、俺は自分が持つている携帯端末にアインハルトからの着信があつたことに気が付く。

だけど、俺が何回か掛け直しても繋がらない」と、それに俺は焦れ始めたのだが。

まさか、アインハルトが夜にあんなことをしてゐるなんて、この時の俺は知る由もなかつた。

アインハルトがやつていたことはつて? 間違いなく俺と爺さんが説教をする内容だつてのは、間違いないな。

うん。

心配かけさせやがつてあのバカ……！

## 第2話 おなじやんと舞まわるハートは最高ですー一年下は愛でんなの、タチ

次回辺りで、ViViD本編に入りますが、ヴィヴィオの出番はもうちょい先ですね。

ただ、ダンはとっくに逃げられない、と言いつことに気が付いていい。

と言つことには、今回の話で、一目瞭然ですね。

何しろギンガに弟分として、愛でられてる時点でダメだし、ナカジマ一家と知り合いな時点でもダメと言つことに、彼は永遠に気が付かないでしょう。

### 第3話 アインハルトよ、なんちゅう阿呆なことを…… 強くなりたくて挑む

物語が動き出す数週間ほど前のセヒルデ魔法学院にて、一つの邂逅があった。

初等部の少女達三人が本を持って歩いているのだが、その歩みは危なつかしいと言えるものだった。

時折ではあるが本の重みに耐えかねているのか、ふりつきながらバランスを必死で取っていた。

仲も良いのか、少女達は談笑しながら歩いていくのだが、階段を上り始めて半分ほど行った時にそれは起こった。

「つーあー！」

「きつー!?」

「ヴィヴィオーー! ロロナーー!」

上っていた少女達のうち、一人、ヴィヴィオとロロナ、と呼ばれた少女達が階段を同時に踏み外して落下していくのだ。

少女達が踏み外したことに顔を真っ青にさせて、絶望、という感情に彩られた声を上げる額の上にリボンをしている少女。

まだ2人はこれから自分の身に起ることを自覚していないのか、呆然とした表情になつている。

自分の友人に起つた悲劇を見たくない、といった様子でリボンをつけた少女は目をきつく閉じ、落ちていく少女達も自分たちの身に起つることの覚悟を決めた瞬間。

「まつたく、あつぶねえな

「へ、へう？」

「え、えあう？」

なんという氣の抜けたような声が聞こえたと同時に、少女達は疑問と言う感情が先に浮かび上がる。

階段の上に居る少女は、自分の友人に破滅を齎す音が聞こえないこと、落ちていく少女達は自分の体が、暖かくて頼もしささえ感じる何かによつて受け止められていることだつた。

ぶつちやけ、少女達を受け止めたのは、ダンである。

それが数週間前、ダンが中等部に上がる前に起つた出来事である。

偶然図書館（の新任の図書のおねいさん曰く「と書つて用事」）に用

事があつた彼が、受け止めたのだが。

これが後にどう影響を及ぼすのか、能力を自分で大幅に制限し、答えを与える力も無いこの時の彼には、分からぬことでもあつた。

「ViViDって何だろ?」

「第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを……」強く

なりたくて挑むんなら家の爺がちょうど良かったのにねえ……」

今は夜中の2時近く、俺は未だに連絡が取れないアインハルトへと携帯端末を操作していた。

店を閉めた後くらいから、爺さんや親父達が夜の町へと出発、アインハルトの捜索を行つてくれている。

既に家には向かつたらしく、彼女が家にいないことは確認済みでもあった。

「へりつ…… やつぱ、あの時に問い合わせておくべきだつたつてことかよ……」

夜に女の子から連絡があつて、その後に連絡がつかないこと、俺の頭に最悪に近い考えが浮かぶ。

それと同時に浮かんでいるのは、昼間の彼女の様子、強ばつた顔に体、隠している何かが、俺に迷惑が掛かりそうだと、勝手に考えて隠していることがバレそうになつた時に決まって浮かべる彼女の顔。

さつき爺さんと親父に連絡したら、まだ見つかっていないとか言つていたが、爺さんの方ではなんか、何人かのチンピラと思われる男共の悲鳴が上がつていたんだが、まさか爺さんに喧嘩を売つたバカがいたのか……？

きりんと極楽にいけると、良いよなあ……（注：死んでません。

それから再び彼女の端末に掛けた瞬間、ついにそれが開かれる。

「アインハルト……？」

『「」、「ゴメンねダンくん』

「って、は？ す、スバル、さん？」

俺は珍しいとこうか、この世界に来てから始めて間抜け面をさらしていただろう。

何しろ、俺がアインハルトに掛けた携帯端末に出てきたのは、ギンガさんの妹の一人であるスバルさんだつたんだし。

正直に言つて驚愕といつかと言つか、なんと言つかである。

幼馴染の見慣れた顔が出てくるかと思つたら、常連さんの顔だつたんだし。

『「ーん、この際だからダンくんにも説明しておくれ』

「へ、うひつす……」

それから聞かされた言葉の数々を聞いて、俺は脱力と同時に怒りが浮かび上がってくる。

あんの阿呆！小さい頃からどつかがズレた奴だとは思っていたが、まさかあんなこと、ストリートファイトをして強さを試してたなんてよ。

しかも連絡がつかなかつた今日は管理局員に喧嘩を売つて、しかも、やられて夜中の道端で氣絶していたなんてな。  
つたぐ！

その後は爺さんや親父達にも同じ様に連絡、事情を伝えた2人も怒つたような様子を見せた後、明日にまずは俺が迎えに行くことで決着が付いた。

覚悟してろよ、アインハルト……！

心配、心配掛けさせやがつて！

それから俺は、スバルさんが指定してきた時間、午前8時にナカジマ家の居間でAINNHARDTが下りてくるのを待っていた。

と怒りを漲らせている俺、無論のこと、我が家では爺さんに親父にお袋たちも同じ様な様子で待ち構えているのは言つまでもない。

『あ、あの、やっぱり、先に入ってくれませんか？』

『ダメだ、あんなにお前さんの端末に連絡を掛けた上に、あん時の、ダンのあの顔の」Jとも見てるんだ、お前がまずは顔を見せて安心させてやれ』

『まずは、謝って、それから怒られ様ね。タンくんだって、貴女にイジワルしたくて怒る訳じやないんだから』

『それに大事な幼馴染なんでしょう？ まづは貴女が彼に説明しないといけないでしょが』

۱۱۱

なんてやり取りが聞こえてくる。

一人は聞き覚えの無い声だつたけど、後の二人は聞き覚えがある  
というか常連さんだし覚えがある、スバルさんとノーヴェさんだ。

恐らくは聞き覚えの無い声は、彼女達が言つていたティアさんつて人だろう。

それから、戸惑いなのか、ゆっくりと扉が開いていく。

そこに立っていたのは、私服のワンピース（以前出掛けた時に俺が選んだ）を着ている彼女の姿、彼女の姿は俺に全てが知られたと言ひことによるものか、小刻みに震えていた。

「アインハルト」

「…………」

「正座」

「は、はい…………」

ソファに胡坐をかいて座っていた俺の言葉に、素直にアインハルトは従つて正座（因みに俺と爺さんが畳の上での座り方として教えた）をする。

「だ、ダン…………」

「なんだ？」

「『』、『』メンなさ』……」

土下座、とも言つべき様子で謝つてくる彼女の姿を見れば、怒る  
気が失せてくるのはなぜだ？！  
だけど、心を鬼にして…！

「ああ、だけどまずはだ、ビリして、あんなことをしていたんだ？」

「……」

「答えられない、か？」

俺の問い掛けに返つて来た彼女の返答は沈黙だった。

ただし、黙つていることに彼女自身が苦しさを我慢しているよう  
な表情をしているからか、俺に関わることでもあるのだろうかね？

この阿呆……などと考えながら更に彼女に問いかければ、彼女  
は小さくだけど確かに、躊躇いという感情を浮かべながら頷いてい  
た。

「答えられないなら構わない、俺もお前が言いたくないことを無理  
に突つ込まないしな」

「……」

「だけど……」

「…… だけど？」

「「」の……バカチンがあ……」

「いたつ……？」

俺はアインハルトの頭に拳骨をかましていた。

ゴツン！と派手な音を立てて彼女の頭に炸裂、彼女も苦痛で表情が歪むのだが、俺は気にせず更に言葉を続ける。

「つたぐ、ストリートファイトで多数の人間に喧嘩を売つてしまも  
昨日はやられた上に夜の路上で氣絶してただあ！！！」

「うう……！」

「お前なあ！！見た目は今でも凄げえ良いんだし美人になるのが分  
る人間なんだよ！もしも変な奴に絡まればたらどうするつもりだつた  
んだ！！？」

「ううへッ？」

「言いたいことはまだあるけどな、俺の家で爺さんやお袋たちが待  
つているからな、俺からはこれまでだけど…… 一つだけ言いたい

「へおれ」の「れ」

「ブクツ、と彼女の頭に漫画調のたんごぶが浮かび上がり、俺はアインハルトの両肩を掴んで、揺さぶつて言つていた。  
感情に任せて言つていた言葉の中に、何かまざい言葉があつた気がするんだが、気のせいとしておこり。

最後に俺がわざと切った所の言葉に、  
疑問の色を浮かべる彼女。

俺は一番言いたかった言葉を、彼女にぶつけるのだった。

「心配、掛けさせるんじゃねえよ。」

「だ、ダン……？」

「大事な、大事な幼馴染なんだよ！お前は！！」

卷之三

あれ、何か言葉の選択を間違えたのだろうか？  
AINHARDTがズギュウウウン！！とか効果音が付きそうな位  
に、顔を真っ赤にしているのが気に掛かる。

それに扉の向こう側のスバルさんたちの気配が、一いや一やはと皿の

か、変なものに変わつたから。

俺の言葉の選択が間違つた可能性が高いなあああああ！！！

なんて考えながら、俺はアインハルトに付き添つて警防署に行くと、そこでお袋と合流。

【お尻ベンベン!!】のお仕置きをされた後、爺に親父とお袋の3人からも説教を受けたのだった。

何度か助けを求めるような視線がAINハルトから向けられてきたが、俺はそれを全て無視して、スバルさんたちに迷惑料としての俺特製業火野菜炒めなどを大量に振舞うのだった。

はあ、なんか、嫌な予感がこれからするよなあ。  
なんて考えつつでもあつたけどな。

### 第3話 アインハルトよい、なごむひき味なことを…… 強くなりたくて挑む

後々で後輩の女の子達とのフラグが生きてくると云つて、眼がWW

## 第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフランクだったでござるー。

AINHARDTのやんちゃ発覚事件から数日、いつもの日常に戻った俺とAINHARDTだが、強くなることに関するの鍛錬と言つか、そんなのは爺さんと俺を中心として行うこととした。  
今まで制限していた能力群のリミッターというか、使用制限を解除して鍛錬の為のメニューを作ったんだよな。

魔力だけは未だに制限を掛け、ギリギリBに届きそうなJランクと/orしてたりするが……これもバレたらやばいかな？

その際に何故か俺も一緒に鍛錬に参加することになったのは、疑問を感じざるをえない。  
あんなに嫌がっていたのに、どうして付き合っているのかって？  
それはな。

『ダン…… 私と一緒にトレーニングをするのは、いや、なんですか？』

といつて前世で見たことのある某チワワの如きウルウル目で、俺をジーと見つめて来るんだよ！

あんな目で見られたらたまらないぜ！？ 俺が気が付いたらいつの間にか頭を縦に振っていたんだからな。

まあ、純粋な組み手に走り込みとかの付き合いでやつていいんだが、やっぱ強くなつてるつーか、何時の間にこんなに強くなつてたんだよ、ここつ。

「あの4年前から思つてますが、ダンはびつしてそんなに強いんですか？」

「俺の場合はあの爺だな」

「え、お爺様ですか？」

そう、俺が4年魔のあの日に戦えた上に爺が俺を部屋から叩きだしたのも、生まれた時から俺がある意味で才能の塊だといつことを知つて、小さい頃からずっと鍛えられたからだよ。

向かってくるアインハルトの正拳突きを俺は右手でいなす運動を利用して、左肘を彼女に打ち込む。

図らずもカウンターになつた形だが、彼女は声をあげることもなくガードしようとする。

「ああ、俺は才能の塊だから、それを遊ばせるつもりもないし、五反田食堂を継ぐ条件の一つが爺を倒すことでもあるつて言わされてな

「才能の塊という言葉には頷けますが、食堂を継ぐ条件がお爺様を倒すと言つのは、ちよつと頷けないものが……」

更に打ち込まれてくるアインハルトの拳、蹴り、これらを俺は全て回避、受け流していく無効化していく。

彼女の表情に一瞬微妙なものが浮かぶが、それはしようがない。

それから数十分、俺達は組み手を行つた後、登校する時間帯に近づいてきた所で止める。

「それじゃあアインハルト、また後でな」

「はい、後、ダン、その…… 今日の放課後、付き合つて欲しい用事があるんですけど……」

「ん、買い物か？ 了解だ」

「え、えと、は、はい……」

珍しいことにアインハルトの方から、放課後のお誘いがあつた。こいつは出不精の性質で俺が誘わないと、休日も俺の家でバイトまがいの手伝いをしているしかないのだよ。

年頃の娘さんがこんな調子ではいけない！と思つて、よく街に買

い物とか遊びに誘っているんだけど、こうして彼女の方から誘いがあつたのは初めてだ！

色々と成長した娘を見る感覚になつていて、俺を、変な目でアインハルトが見ていたんだが、まあ気にしないことにしておくとしよう。

「vi vidって何だろ？」「

「第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフラグだったでござるー」

そして時間が過ぎていき遂に放課後となる。俺は隣の席で帰り支度をしているアインハルトに声を掛けた。

「そんじゃ、ビリに行く?」

「はい、実は行く所は、もう決まってるんです

「珍しからじまでも来ればすごい事になるな

今日のアインハルトは、本当にビリしたんだらうか?いつもならば俺が手を握つて引っ張る形で彼女から、ビリに行きたい、とか、そういうリクエストはなかつたんだけどな。

だけど俺の言葉を聞いたアインハルトは途端に機嫌が急降下して、唇の先を尖らせていく。

あ、拗ねた。

「……むう、私が行き先を決めていたらおかしいですか?」

「いや、そんなわけないぞ、ただ無茶苦茶珍しいと思つてな

「 もう、 でしょ うか？」

「 お前、 自覚 なかつたのか？」

唇を尖らせて、 頬も少しだけ膨らませてから こうって来るアインハルト。

…… ちょっとだけ 可愛いとか 思つたのは 秘密だ！

俺の言葉に 小首を傾げる アインハルト つて、「 イツまわか、 いつ も自分が 行き先を 決めて いなかつたこととか、 出不精のこととかに 自覚がないのかよ。

なんて 考えていたんだが、 次の瞬間に 俺の頭の中は 真っ白になつてしまつ。

「 自覚は 少しあつました…… でも、 貴方が 私の手を 握つて 楽しそうに 引ひ張つてくれる 姿を見ていると、 私は 十分 あきる くらいに 楽しくて、 幸せな 気持ちを 感じるんです」

「 はへ？」

「 だから、 私は……」

「 む、 おうあう……」

僅かの上気した頬と、本当にそう思っていることを思わせてくれる表情。

はつきつ言って、いつものクールビューティーと言えるアインハルトはどこに！？ と言いたくなつてしまつ。

アインハルトは自分の胸に両手を当てて、本当に幸せそうな微笑と共に俺にそう言つていた。

「コイツって、たまにだけ本当に聞いている方が恥ずかしくなることを言つことがあるんだよなあ。

そんな感じの事を唐突に言い出すから、肉体年齢では同じ年で精神年齢では上のはずなのに、俺が彼女に翻弄されることがしばしばある。

「クスッ、これから先は、まだ、ヒ・ミ・ツ、ですよ」

人差し指を自分の唇に当てて、アインハルトはそいつっていた。小悪魔つ娘の如き笑みを浮かべて言つているアインハルト、そんな見るもの全てを赤面させてしまうそなくらいに可愛い彼女を俺は自分の頬が赤くならないように必死でコントロールしていたんだが、アインハルトは俺の唇に自分の人差し指をくつつけて来ていた。

「いひつて、こんな奴だつたのか？ というか、あの時、スバルさん家で言つた言葉の後から、こんな様子が増えた気がする。

「あ、ああ…… そ、そそ、その日が来るのを、たのしみにしている」

「はい、楽しみにしてください」

思わず一歩引いた俺だが、アインハルトはそんな俺の様子も微笑ましいのか、ニコニコと微笑みながらそういっていた。

（こつが貴方に…… 私の事を一番大切な女の子、と言わせて見せますから、だから、覚悟、してくださいね）

そんなことを考えているアインハルトの事を知らない今までな。

ダンとアインハルトが学校を出た後、ノーヴェはとあるオープンテラスを持つカフェにて、彼らを待っていた。

ただし、自分が呼んだ人間以外の者達もいる状態ではあったのだが。

「つて、どうしてお前らがいるんだよー？ 呼んだのはチンク姉だけだぞーー！」

それから返つてくる彼女への謝罪と思われる一つの言葉と、別にこの場にいることを気にしているぞうな言葉の数々、ノーヴェは思わず頭を押さえながら一度うめく。

そして、その後に自然と思い出していた、ダンが近くにいない時に彼女と交わした会話を。

『かつて……　霸王イングヴァルトは、聖王女オリヴィエに勝つことが出来ず……　彼は彼女を救えなかつた……』

『だから時代を超えて、再戦つて訳なのか？』

警防署の中でダンが母親のレンと共に手続きに出でている時間帯に出来た会話の切つ掛け、意外な事に話しかけてきたのは彼女の方からだつた。

そのことに少しだけ驚いた様子を見せながらも、ノーヴェは応じているのだが、少しだけ彼女の様子が気がかりでもあつた。

『……霸王の血はやはり時代と共に薄れていきますが、たまに私のように身体資質と記憶を受け継ぐ者が現れます』

『それで?』

『彼は、彼女に一度も勝利することがなかつた記憶が、私の中に違つたイメージで流れ込んでくることがあるんですね』

『…… どんなイメージだ?』

自分の言葉が聞こえていいのか、それともこれから返事が返つてくるのかが分らないが、アインハルトは静かに言葉を紡いでいつていた。

そんな彼女の様子にノーヴェは疑問の色を浮かべるもの、すぐに彼女に問いかける。

それと同時に彼女は、一筋の涙を一度閉じられた目から流す。

これを見たノーヴェが驚く間もなく、彼女は大粒の涙を瞳に浮かべながら、ノーヴェへと向き直る。

『私が！私が弱かつたから！彼を助けることが出来ずに、弱いわたしを守つて、私の目の前で……！かれが！私にとつて一番大切な彼が！命を……つ！』

『…………』

今は自分の自宅ともなつてゐる家で見た彼らの様子、ノーヴェはダンとアインハルトの二人がお互いに、大切に想いあつてゐる関係だとは分かつっていた。

どう答えて良いのかが分らない。

それがノーヴェの率直な感想だつただろう、まだ彼女自身が本氣で異性に恋心を抱いたことがないのだから無理もないといえる。

彼女が言つてきたイメージというのが、一番大事に想い、異性として思いを寄せている自分の想い人が目の前で【殺される】姿を、夢で見せられるというのだから。

大粒の涙を流して、しゃくりあげてゐる彼女を見ていたノーヴェだが、一度首を横に振ると口を開いた。

『そのことも含めて、あいつと話してみたら良いんじゃないかな？』

『ふえ？』

『ダンはさ、ギンガやスバルと一緒に五反田食堂に行つたときに話す程度だけども、お前がそれを話してくれるのを待つてゐるかもしないぞ?』

『……』

『今朝の事を見ても、アイジがお前の事をかなりしつかりと見ているのは間違いない、だから、さ、お前も』

『…………』  
彼には、霸王の記憶のことは話していますが、このイメージだけは言つてません……

霸王の記憶のことを、既に言つてゐるといったAINHARDTにも驚いた。

だが、ダンが死ぬ夢を話していない、といふ事を聞いたNOEVILLEは当然だと考へる。

自分にももしも彼女のよくな想いを寄せた異性が現れたとして、その彼に言えるだらうか。

彼が死ぬといふ夢を度々見ると、

自分であれば言えない。

『でもさ、それでも、ダンにそれを話してみるよ、霸王の記憶のことは言つたんだろ?』

『はい』

『じゃあ、一緒に考えてみたらどうだ？ ダンは間違いなくお前のことを理解してくるからさ。』

『…………』

最後の言葉に小さく、自信がなさそうに頷いた彼女を見た。だけど、ノーヴィは思つ、aignhardtを本気で心配していた少年と、aignhardtといつ少女の思いが通じることを。

そして、それからダンは直面する。

「あの時助けてくれたのは貴方で、しかも先輩だったんですね！…！」

「あの時はコロナとヴィオを助けてくれてありがとうございましたよこます！…！」

「ダン先輩！なのはママと一緒にお礼に窺います！だから、今度は自己紹介、してくれますか？」

自分がかつて助けていた少女と。

「ダン」

「は、はい……」

「年下趣味だつたんですか？」

「それひつでえ誤解だからアインハルト！――！」

という危機に。

## 第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だつて？ あはははっ！ まつさかあ

座り直してAINHARDとのやり取りも思い出し終わった彼女を見計らっていたのか、スバルとティアナが座っているテーブルに眼帯をした少女が座る。

「チング姉、どうかしたのか？」

「ノーヴェ、来るといつていたのは、彼女、AINHARDだけではないのか？」

「ああ、そのこと、か」

チングと呼ばれた少女は柔らかくも鋭い、という声でノーヴェに向かつて問いかける。

彼女達が合流する前に、言っていたのは紹介したい子達がいるという風に聞いていたからだ。

だからこそ、彼女は聞いて置く事にしたのだ、自分達がある少女に彼らを紹介しようと考えている者達が、自分たちのかけがいのない友人であり親友と言える少女、彼女を傷つけてしまう可能性があるのか否か。

という事を、

「チングクの警戒って言つた、そういうのも尤もだけど心配要らないよ」

「ん？ どうしてだ？ スバル」

「だつて、もう一人の子は五反田食堂のダンくんだよ」

「ああ、ギンガによく懐いていた、あの不思議な少年か」

「やうそ、ギン姉お気に入りのあの子だよ」

「…………（いや、ギンガのあの田は気に入つていろいろ  
よりも………… 獲物を狙う捕食者の田、つつーか………… ギンガの奴……  
…………まさか、なあ？）」

スバルの五反田食堂のダンといつ葉にて、一気に警戒を緩めるチングク。

ぶっちゃけると、彼女を含めたナカジマ一家は約一名を除いて、  
月に一度通うといつ常連なのだから、信頼と信用といった関係は既  
に構築されていたのだ。

チングクとスバルのやり取りを聞いていたノーヴェは内心で、少し、  
以前にギンガが彼を見ている視線の事を思い出していた。

あれはなんだつたんだろうか、そう思いながら彼女は少し前に見  
たドラマを思い出す。

「だつたならば、今日の予定が合えば、ギンガも誘えればよかつただろ？」「

「うーん、ギン姉つて忙しいからね、何しろアインハルトの事があつた日の夜も管理局に缶詰だつたみたいだし」

「…………（いや、まで、その日はギンガの仕事は9時くらいで終わつてたはず……。ダンの奴からアインハルトのことがあつた日も来てたつて聞いたんだが、まさかショタロンの上に、自分好みにちゅう……いやいやいやいやいや……育て上げて、一番美味しくなつたとき）ペロリ……なんて考えているんじゃー…？」

かなり想像力が豊かと言つか、なんと言つかである。

一人で顔を赤くしたり青くしたりしている彼女を、ティアナは疑問と言うか怪訝に見ていて、他の人間達は面白いものを見る目で見ていたのだった。

但し、ここで彼女の疑問にちょっとだけ答えれば……。仕事だと嘘をついてまで一人で五反田食堂に行つて、ゆっくりじっくりと時間を掛けて、ダンと一緒に食事をしていった。

とだけが言えるであろう。

「ちょっと、三人とも良いかしら？」

それから会話を続けよつとしたときに、ティアナが少しだけ真剣な表情になっていた。

「vi vi dつて何だろつ？」「第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だつて？ あはははつ！…まつさかあ！…」

「ん、どうしたの、ティア？」

「どうした」

「なんだよ」

周囲の目などを一瞬氣にして小声にするように、とのジェスチャーをしてきた彼女に従つて、表情を引き締める三人を見たティアナは言葉を続ける。

「そのダンくんって子の事だけ…… 調べてみよ」と囁くの

「どうじつことだ？ 彼は何の力もない、我々が守るべき民間人だ、あまりそういうのは感心できないことだが？」

「…… 本当に何の力も無い民間人ならね……」

「何か、気になることがあったの？」

言い放ったティアナの言葉に嫌悪感を表したのは、チenkでつた。

チenkやノーヴェを含めた少女達は過去に、ある事件【「S】事件とも呼ばれるものを起こしているのだが、それは割愛させていた

だく。

その事件の後に管理局にて働いている彼女としては、傷害事件を起こしていたAINNHALTはともかくとして、店に行けば自分達を暖かくもてなしてくれる。

そんな優しい少年の身辺を探ると「いつに」とついて、良い感情を持てなくなっているのだった。

だが、チンクの威圧感すら籠つた言葉をティアナは軽く流すと、どこか奥歯に物が挟まつた物言いをして、それにスバルが純粹な疑問を投げかけるのだった。

「AINNHALTから聞いたんだけど……」 4年前の事件、あの時にダンくんつてガジェットを魔法も使わずに丸腰の、その、生身で結構な数を撃墜していたらしいの

「なつ、にー？」

「う、うそ……」

「マジかよ……」

彼女の言つ事件、第1話でダンが巻き込まれて、AINNHALTを庇いながら撃墜していた存在の名前は【ガジェット・ドローン?型】と呼ばれる戦闘機械である。

無論のこと、魔法も使えない人間や、丸腰の人間どころか当時の

彼の年齢を考えれば、そんな戦闘機械を撃墜する【あいえ  
ない】としか言えない代物でも合つた。

驚愕に彩りられる3人の表情を見れば、その困難さが窺えると言え  
る。

見た目は麗しく華奢な少女たちなのだが、その正体と言えば危険  
という言葉が裸足で逃げ出すくらいの実力者といえる、少女達な  
だから。

だが、言葉が自分たちの中で落ち着いて来たときの彼女たちの様  
子と言えば、信じられない。

という色がありありと張り付いていた。

「本当のことなの？ それって……」

「スバルの言つ通りだ、幼馴染と言つことだらつ。あの時に巻き  
込まれた時に、一緒に逃げている際の記憶を混同させているかもし  
れない」

「だけど、aignhardtの奴はダンのことじや嘘は絶対につかない、  
そう思えるくらいの入れ込み具合だつたけどな……」

そういうてほとんど信じていない様子を見せる彼女達だったが、  
ティアナは頭を抱えながら、更に口を開いていく。

「彼女に言われて、記憶も確かめをせられたから、間違いないわ……」

「記憶を見たのか……？」

「ええ、信じられないなら、私のあの日の記憶を見てください……。つて彼女に言われてね……」

「そう、か…… 私達も良く食堂を利用させてもうっているからな、今度言った時にでもそれとなく聞いておくとしよう」

「ええ、お願ひ」

頭を抱えてうめくよつて言つてこむティアナと、考え込む様子を見せる彼女達だったが。

チンクが場を纏めるような発言を行つた後、ティアナもそれに同調し、この話題はこれまで。

そんなものを含んだ表情で、彼女達は一度頷き合つたのだった。

「ノーヴェーみんなーー！」

場に広がっていた深刻な話題がちよつと良く過ぎた辺りで、彼女

達の最初の待ち人が来るのであった。

アレから学校を出た俺とアインハルトは、目的地を指している  
んだが。  
さつきから。

「で、どこに行くんだ？」

「着いてからのお楽しみ、ですよ」

「それで何度もだよ……」

俺が目的地は何処か、という事を聞いてもアインハルトは楽しそ  
うに笑うだけで、答えてはくれないんだよなあ。  
まあ、アインハルトが楽しそうだから良いかね。

なんて考えている間が幸せであったことを俺は知る。

何しろ、自分がどうして【原作】に関わっていることを思い知らされるのだから。

「あ、あの喫茶店です、待ち合わせをしている方々がいるんですけど、宜しいですか?」

「まあ、構わんが…… おりよ、ノーヴンさんにスバルさんたち……? それにウェンティさん……?」

「知っているんですか?」

「ん? ああ、アインハルトは知らなかつたつけ、あの人達だよ、最近良く家を利用しててくれて、しかも、ナカジマ盛りなんていう盛りを誕生させた人達つてのはさ」

「あの方達だつたんですね……」

オープンテラスを持つたカフェをアインハルトが指したんだが、そこに揃う面子を見たと同時に俺の背中をいやな汗が伝う。

博麗の巫女並みの勘が叫びだし、アンサートーカーまでもが【行つたらエライことに巻き込まれるぞ!】と叫びだす。

俺はすぐに後ろに向かって全速全身……を実行しようとしたのだ

が、何時の間にやらAINHARDTは俺の手を握っていたのだから驚いた。

ほ、本当に何時の間に……

ただ、俺の言葉を聞いた後、最後に確認するように彼女達（特に胸を仇のように見ていたんだが……）を眺めるAINHARDTの目が、ちょっと怖かったのは氣のせい、氣のせい、だよね？

「じゃあ、ダン、行きましょう？」

「あ、うん、ニゲナイカラ、テヲハナシテモラエタラ、アリガタイナア」

「逃げないって約束してくれたら、良いですよ

「うん、約束するサ！」

そういうやり取りが合って放してもらえたんだけど、今度は腕と  
かを組んでない状態でぴったりと引っ付いてきたから、間違いなく  
逃がすつもりはないな。

俺はこれから起こるであろう出来事に、人知れず溜息をつくのだ  
つた。

それにあの初等部の三人の女の子って、なんか見覚えあるんだが、  
氣の所為かね？

などと考えながら俺達は近付いていくのだった。

それから俺達は彼女達の近くに近寄る。

「AINHARDT・ストラーツ、参りました」

「こんちやーっす

「お、来たな、2人とも」

凛としてよく通る、透き通つてさえいるAINHARDTの声に、気の抜けたというか間の抜けた様な声だったと思う俺の声。

俺達2人を確認したノーヴェさんはニカツ、とした清々しくもある爽やかな笑みを浮かべて、あの日に出会ったティアナさん、いつ

も家を利用しててくれるスバルさんも微笑を浮かべていた。

ただ、初等部の女の子たちが俺を【ぼーぜん】と言つた様子で見ている。

やつぱり俺も見覚えがあるなあ…… 一人は金色の髪に紅と翠の虹彩異色の女の子、次は灰色に近い髪を飴玉を包んでいる包装のようなりボンでツインテールにしている少女、最後は藍色と言える髪に黄色のカチューシャ？ リボン？ そんな感じのものをつけた女の子……

うーん、喉の奥に小骨が引っ掛けたような感じだなあ…… どこで見たつけ。

「こいつらが、お前らに紹介したかった連中なんだけど…… ヴィオにコロナトリオ、どうかしたのか？」

「……あ、あの……？」

「お、おひ……？」

考え込む俺と、俺達を指し示して彼女達に言つて居るノーグンさん。

だけど、小学生3人組はノーグンさんを無視して、俺に一気に詰め寄つてくる。

そのどれもが興奮と言つたか、どうじてか、藍色の髪を持った少女

以外の2人は頬を上気させて、まるで【恋する乙女！】とも言つてしまいそうになる様子なのが気に掛かる。

隣にぴったりとくっ付いているアインハルトからは、なんか、つ、

「あの時は、ありがとうございましたー。」

「…………おおー！」

「なにか、覚えがあるのですか？」  
ダン

少女達が、一斉に頭を下げてきた」とで思い出す。

あの日、初等部の図書館に新任の図書のおねいさんがやつてきたから、それ担当でに行いついた時、俺の目の前に落下してきた女の子達だ。

確か、金色の髪の娘とツインテールの娘が落ちてきたんだつけ。  
彼女達からのお礼の言葉を聞いたアインハルトは、純粋に疑問の  
色を強めた顔をこちらに向けてくる。

さつきまでの冷たい雰囲気が消えて、助かつたあ。

「まあ、な、一ヶ月くらい前だつたけ？ その時に俺が階段を上つていたら、この金髪のお嬢さんと灰色の髪のお嬢さんが落下し

てきてな、それを受け止めたんだよな

「やうなんですか……」

「はい！あの時はヴィヴィオと口ロナが大怪我を負つ事を覚悟してしまったから、だから、あの時は本当にありがとうござります……」

「私と口ロナも、下手したら死んじやう所だった所を先輩に救われました！だから、ありがとうございます……！」

「あの時からお礼を言いたくてずっと探していたんですけど、先輩だつたんですね！でも、あの時は本当にありがとうございます……！」

「あ、いや、うん……まあ大した事はしていないから、なあ

正直に言つて照れくさいといつかなんと言つた……

周囲にいるスバルさんたちの視線も感謝の色といつか、感心の色とこづかといつものに変わつてゐるしなあ、かなり照れくさい。

「そんなことあつません！」

「やうですよ……わたしも口ロナも危ない所を先輩に助けてもらつたんですね！だから大した事なんですよ……！」

「先輩、口ロナとヴィヴィオを助けてくれて、あの時はお礼も言わせてもらえなかつたんです、だから今度は受け取つてもらいますよ

！」

そして、彼女達は俺の最後の言葉をより強く否定してくるんだけど、正直に言って、俺は本当に大した事はしていないんだよなあ。何しろ助けて、なんかほっとけなかつたから彼女達が持つていた本を全部俺が持つて、図書館に持つて行つた位なんだし。

ただ、落ちたりした衝撃が強かつたのか、俺の名前を聞いてくることもなかつたし、受け止めた時の事を褒めるばかりだったから、名前もスルーしていたというのが本当の所だつたりする。

「だから、あの時に出来なかつたちゃんとした自己紹介、してくれますか？」

「ああ、まあ、大丈夫だけど……」

恐らくヴィヴィオという少女だろう。

金髪の娘が、俺にキラキラとした瞳を向けて言つて来る。

それに俺は頷くと、彼女はより表情を嬉しそうに輝かせて。

「わたしの名前は高町！高町　ヴィヴィオです！…ママも貴方のこ

とを知りたがっていましたーママの名前はなのはって言いますー。」

ビシリー。

そんな音を立て一瞬（コンマレベルで一瞬）俺の体は凍りつく  
のだった。

「、この娘が、あの魔王わまの娘だとか……？

……」  
「」で知り合つてしまつたのが運の付きなのか  
なんて、俺は考えてしまつた。

## 第6話 勉強の休憩ついで奴は怖こよなあ……だけじゃ、今回の生で懲りの仕事

後書きのアンケートは締め切りましたーお答えいただいた皆様方に感謝の言葉を述べさせていただきますー  
本当にありがとうございますーー

## 第6話 萩原の狂つゝて奴は怖いよなあ……だけじゃ、今回の生で悪ひのせ

俺は今、正直に言つてすぐに逃げ帰りたいー…そつ思つていいなぜなら。

「//シード式のストライクアーツをやつてこる町 ヴィヴィオといいます！」

「ベルカ古流武術、AINHARDT・ストラトスです」

田の前の広がるのは、2人の将来有望な美少女達が自己紹介と握手をする姿、本来ならば非常に絵になる光景になるはずのそれ。俺の目の前に広がつている彼女達の様子は、そんな物をぶつちぎる位に恐ろしいものだった。

なんですかって？

「所で、一つ聞きたいんですけど？」

「なにか？」

「ダン先輩とはどういう関係なんですか？」

所謂【修羅場】とも言うべき状況になつてゐるからだ！  
全く目が笑つていないアインハルトに、ヴィヴィオちゃん、仲良く  
握手をしているはずの手がお互の手を、握り潰さんばかりにギリ  
ギリと握り締められているのが見て取れる。

「…… 幼馴染であり、私も彼もお互いを大事な幼馴染だ、と、そ  
う思つてますよ？」

「へえ、じゃあ、今日から大事な友人である女の子、なんていう枠に私達が入つても大丈夫なんですね？」

## 「面白い冗談です」

「冗談なんかじゃないんですよ……」私も、「口ナも……」

「クスッ、クスクスクスクスクス……」

「「ウフフフフ...」」  
アハハハハハ

流石は時期魔王（血の繋がりはありません）候補の女の子だ……

何でこんな事になつたのかねえ……

に思い出せる。

あの時、俺に名前を言つてきて、それに答えた俺とヴィヴィオちゃんにコロナちゃんとの間にアインハルトがいきなり割り込んだんだ。

それからあんな調子で険悪ムード…… ちょっと離れた所で事の成り行きを見守っているスバルさん達がいるんだが、是非とも助けて欲しいものだ。

(スバさん、ノーグンさんヘルプ！！！)

(ゴメ、ムリ)

俺はこの場を收められそうなお一方に助けを求める視線を向けるのだが、彼女達は視線を逸らし、その上に他の方々にいたつては飛び火するのを恐れてか、俺と目を合わせてくれる人は誰もいないのだった。

人生つて…… 無常だよなあ……

↓↓↓↓↓つて何だらう？

↓第6話 若氣の至りつて奴は怖いよな……だけじよ、今回の生で思うのは年上のおねいさん性の付く交渉の手解きをしてもらつて1-3までには脱・童貞を！ん、アインアルト？ ど～

それから俺達は区民センター内のスポーツコートに移動する。元々の目的がアインハルトとヴィヴィオちゃんのスパーリングの為だったみたいなのだよ。

ただ、二人とも【殺る氣】に満ちているのは、気のせいだらうか？

会話は互いに存在せずにコートの中央に立つ2人、互いに礼をして構えを取り。

「スパークリング4分1ラウンド、各種魔法の使用は厳禁、純粧に格闘のみな」

それと同時に言つてゐるノーグヒさんの言葉に頷く2人。彼女の言葉を合図とした様にアインハルトとヴィヴィオちゃんの聞には、闘氣と呼べるくらいの濃密な氣配が立ち込めていく。

そして。

「レディー・ゴー――。」

ぶつかり合つアインハルトとヴィヴィオちゃん……ふむ。

「へえ、大したもんだ……ヴィヴィオちゃん、あの歳であんなに動けるなんてな……」

「ヴィヴィオも凄いけど、あの娘も凄いわよ、でもさ、ダンくんはどっちが勝つと思っているのかしら?」

「アインハルトで間違になにっしょ」

「ええと、それほどひどい？」

ヴィヴィオちゃんの動きを分析して、純粋に感心した声を思わず上げてしまつたんだが、ティアナさんにそのことを聞かれてしまつ。うわつちやお、やつちまつたい。

なんて思つても表に出れないように努力しつつ、即答に近い速度でティアナさんの問ひに答える俺だが、スバルさんからも逆に問い合わせが来てしまつ結果となつてしまつた。

因みに今現在の俺の位置はスバルさんとティアナさんに西隣を挟まれた位置に立つてゐる、と言えば良いだろ？。

もつ一つ気になるところか、どうしてティアナさんは隙あらば俺の頭を撫でようとするのだろうか？ 確かに今の俺の身長を考えればティアナさんことひよこはくよひ良こ位置に俺の頭があるだろうが……

男だつたら、撫でようとした手をバシンーと言ひ感じで跳ね除けるんだが、美人なおねこさんだし、そんな真似はできないじゃないか！

俺を撫でようとして、自分のしようとしていた行動に気が付いて、恥ずかしそうに口元をもじもじさせながらも、再トライしようとするティアナさんことんでもない萌えを感じたわけじゃないよ？ ほ、本当に、本当にだよ。

「確かにヴィヴィオちゃんの動きは凄いもんですよ、体を動かす瞬発力に柔軟さ、見た限りでの攻撃の重さ、体の動き、全部がそれなり以上のレベルで纏まっています」

「へえ……（この年でそこまで見れるキ!!も凄いと思うナビ……）」

「だけど、あくまでそれなりです、アインハルトの奴はやんちゃしてて、一応は実戦経験と呼べるものがありますし、それに……彼女の動きに目配り、戦い方を見る限り格闘戦に向いてな……」

「…… 続きを言つてくれるかな？」

スバルさんの疑問に答えていたんだが。  
あやつべ、やりすぎた。

彼女達の目が語つている【君は何者?】と、考えるまでもなくおかしさ満点だ！初見でこれだけの情報を見抜いただけじゃなく、資質まで…… なんてな。

「口一口と楽しそうに言つて来るスバルさんが、今の俺には悪魔に見えてくる。

ヴィヴィオちゃんの母親があの【リリカル マジカル 魔法少女  
高町 なのは 2 歳です！】な、俺が一番恐れているお人なのは確実だ。

アンサートーカーでも確認取つたから間違いない。

…… もしかしながら詰みきつた？ ダラ、ダラダラダラダラ  
ダラと大量の冷や汗が出てくる。

ここでこれ以上の事を言えば、間違いなく魔王様に目を付けられ

る……！

だけど、俺の言葉が続くことはなかつた。

どうしてかつて？ ヴィヴィオちゃんがアインハルトの掌底を受けて吹き飛ばされたからだ。

「……（ダンセんとの事、気になるナビ…… アインハルトさ、凄い！…）」

戦いを見ていたんだが、二人があの調子だったのは最初だけで、後はヴィヴィオちゃんは楽しそうに、アインハルトは戸惑いと悲しみが籠り始めていたんだよな。

…… アインハルトから聞いていた聖王女とヴィヴィオちゃんの印象が重なるから、アインハルトの奴は聖王女とやらとヴィヴィオちゃんを一緒ににしてしまつたんだうつな。

それからアインハルトから受けた一撃に尊敬とかの感情で目を輝かせるヴィヴィオちゃんに、苛立つている様子を浮かべるアインハルトの対象的と言える姿。

やれやれだ。

そう思いながら俺はズボンのポケットから、とあるものを取り出しながらアインハルトへと近付いていくのだった。

『え、ちょっと…… どうしてあんなのが、ポケットに入つてたの?  
?』

『いや、ちょっと待ちなさいよ…… ポケット膨らんでなかつたじ  
やない……』

『まさか、リアル四次元ポケットつか!?』

なんていつているギャラリーの皆様を置いてな。

…… これの構造だつて? スキマとかイロイロなものを試して  
たら出来た…… とだけ言つて置く。

そして、アインハルトはそのままの様子で踵を返そつとする。  
その瞬間を狙い。

「ゴルアー!」

「へふっー。」

すぱあんーーといつ小氣味良い顔と共にAINHARDの頭を、ハリセン、で引っ叩く。

それと同時に悲鳴みたいな声を上げるAINHARD、彼女ひとつは予想外に痛かったのか、涙目でこっちを見てくる彼女。そんなAINHARDを、俺は良く不良が鉄バットを肩に当てているポーズと、ついさっき口に入れたガムをくつちやくつちもじれせながら、彼女を見据える。

「何をどう思つたか知らんが、せめて終わらせ方へうこまちやんとしろこーーー！」

「え？」

「おめえさんは武術を修めているだろ？が、ここでは武道者同士の立場での試合なんだよ、武道の基本は礼に始り礼に終わるー鉄則じやい！バカチンがーー！」

「で、でも、いったーー！」

「ああん？ なんか文句あんのかーー？」

「あ、ありません……」

俺の言葉になんか反論しようとしてきたアインハルトの頭を、俺は問答無用で再びハリセンで一閃する。

ほとんど同じ箇所を叩かれた所為か、より涙目になるアインハルト、ぼーゼン、としているギャラリーの皆様方。

「でだ、今日のお前は、最初のお前ら二人の動機とかはともかくとして、最初から真剣に相手をしてくれていたヴィヴィオちゃんに対して失礼な真似をしたのは、分るな？」

「は、はい……」

俺の言葉にし�ょげるアインハルトに心が少々痛むんだが、こいつのこれからを考えたら心を鬼にもせねばならんな。

何しろ、俺以外の友達が出来るかどうかの瀬戸際でもあるんだし。

「ノーヴェさん」

「な、なんだ？」

「来週あたり、またこうして集まれますか？」

俺の言葉に彼女達は一度田配せをしあつと、互いに頭くじうやうり、他の皆さんからも〇〇がでたらじい。

「まあ、集まれるけど…… どうしたんだ?」

「やうすね…… 今田のお詫びもかねて、ヴィヴィオちゃんとアインハルトの練習試合みたいなのを組みませんか?」

「いいぜ、それにヴィヴィオも、このままじゃ不完全燃焼気味だらうし構わないだ」

「そんじゃ、決まりつすね」

俺の問いに答えるノーヴェさん、最後の俺の言葉を聞いて他の皆は嬉しそうな様子を見せて、アインハルトとヴィヴィオちゃんにホールを送つていたりとか、ノーヴェさんが俺に小さく頭を下げて謝罪するように手を向けてくるから、俺が割り込まなくとも彼女が上手くやつてくれただろうかね。

だけど、俺はハリセンを再び普通にポケットから繋がる不可思議空間へと直すと、今はへたり込んでいるアインハルトの前に立ち、彼女の頭を、くしゃり、となれる。

「ふえ……?」

「やつこつ」とだ、お前さんも大丈夫だわ~。」

「は、はー……」

もう確認も取るのだった。  
だけど、『ヴィヴィオちゃん』と『ロロナちゃん』と思われる羨ましそうな視線がちょっと気になる。

…… フラグ立つてるとか？ まさかなあ！！それにこれから俺は肉体年齢的に りたい盛りになるんだし、彼女達に気を向けたら 犯罪じやん！

ただ、ヴィヴィオちゃんにそんな感情を向けたりしたら、恐ろしいママさんが飛んでくるのは間違いないな、うん。

そんで俺に撫でられているアインハルトはとこづか、とっても嬉しそうにしていたのは気の所為かね？ なんか動物の尻尾があれば ブンブンと勢い良く振られているのが幻視されるんだが、なあ。

それからは、スバルさんにノーグンセとティアナちゃんのお三方に誘われて、食事に行って家に帰ったよ。

俺がティアナさんに可愛がってもらおうとしたら、絶妙なタイミングでアインハルトに邪魔されて、楽しめなかつたという特典付だけどなー！

それからの1週間はあつとこつ間に過ぎ去っていく。約束の練習試合の時となる。

## 第6話 カラマの件について奴は怖いよなあ…………だけじゃ、今回の生で思つたが

今現在エリオの扱いに迷つております。  
選択肢としては2つです。

?はエリオT-Sのショタコン化、ダンのチョリーを積極的に狙いに来る女性であり、アインハルトとギンガ、ロロナ・ヴィヴィオとのガチバトル勃発。

?はエリオは男であるが、ショタのガチホモでダンの後ろを……でも、普段はノンケを演じているが、フェイトとキャラ口は薄々感ずいていて、エリオの矯正を図る。

というのが、候補なんです。

……エリオは当初原作通りでの登場を予定していたのですが、感想でT-S要望があつたときに?のエリオが浮かんだ次第です……

ただし、このまま何事も無かつたら…… ?のエリオが登場します。

## 第7話 エーと、俺って詰んだのかなあ？ いやまだ、まだ終われんよ！

AINHARDとDANを見送った後、スバルたちは帰<sup>モ</sup>する。それからスバルは自室に入ると端末を開いていた。

『あ、スバルじゃな』どうかしたのかな？』

「んばんは、なのはさん」

『例のAINHARDって娘の事かな？』

『はい、って言いたい所ですけど……』

『何があつたの？』

いつものように優しい微笑を浮かべているのは【高町 なのは】であり、詳細は割愛するもののスバルが前に所属していた部隊では、彼女にとつては隊長でもあつた女性である。

そう、今日のヴィヴィオとAINHARDの一件は既になのはに報告されていたのだ、流石に母親に何も言わずにスパーリングなどを行わせるわけにはいかないだろう。

だが、なのはの予想とは違つてスバルの言葉は含みを持たせたものになつていた。

「なのはさん、私が前に言っていた五反田食堂って覚えてます？」

『スバルが美味しい定食屋さんついていたお店で、ギンガも良く通っているお店だよね？』

「はい、実はアインハルトと一緒に、その跡取りの彼女と同級生の男の子も一緒にいたんです、アインハルトと幼馴染だったみたいで」

『ふむふむ』

「なので、スパーリングに同席していたんですけど、彼

『彼？』

「ヴィヴィオとアインハルトのSPAを見て、すぐにヴィヴィオの適正などを正確に見抜いていたんです」

『うそつー？』

驚愕、その感情を顔に貼り付けるのはに、無理もないとスバルは考える。

実際に田の前で見ていた自分でさえも信じられない、というのが心境だったのだから。

ジョイル・スカリエット事件通称【J・S】事件と呼ばれるそれを経験して来た自分なら、ある程度の事は見抜けるようになつてきた。

だが、彼は今まで平和に、尚且つ普通に過ごしてきたはずの少年なのだ、そんな彼が僅かな時間で他者の適正を見抜けていたということは天性の才覚を、それも極上のものを持っていることもあるのだから。

「信じられないのも無理は無いと思こますけど……」

『「ひつん、信じるよ、スバルの言葉でもあるしね』

「ありがとうございます、なのはさん…」

『「だったら、AINHALTちゃんだけじゃなくて、ダン・ゴタンダくんとも会つてみた方が良いかもね……』

そのやり取りの後、スバルは手元に一つの端末を取り出すと、それを見ながら口を開く。

「なのはさん」

『「どうしたの?』

「実は、ティアナがダンくんの事を調べるところって彼の事を調べていたんですね！」

『スバル』

「え、あいや、違うんですよなのはさん…流石に彼のプライベートは調べてないですよ！」

『当然だよ』

スバルがいっていた【調べる】といつ言葉になのはは咎める空気を出しつつ、彼女を見据えていた。

それからスバルは慌てて弁明すると、なのはの雰囲気は少し軽減されではいたが、変わらずになのはの表情は厳しいままであった。

それから暫くの間、言葉のやり取りを繰り返し、なのはは納得と驚きを何度も見せ、スバルはそんな彼女の様子に頷きながら話すのだった。

「видите何だらう?」

「第7話 えーと、俺って詰んだのかなあ? いやまだ、まだ終わんよ! なんとしても逃げ切つてみせる! 魔王からなあ!」

「そんでもって1週間という時間はあつといつまに過ぎていいく。  
俺がなにをしていたのかつて? アインハルトに付き合わされて朝と夜の鍛錬に付きあつていたさ。」

「爺さんはアインハルトとの時間を大切にしろい! とかいつて、店を手伝わしてくれなかつたし、親父やお袋たちもな~んか、からかいを含んだ笑みを見せたからなあ。」

「アインハルトとの関係を誤解している可能性が高い、何しろ昨日、爺が【曾孫をとつとと見せやがれ】とか言つて来たし……」

「いや、ちよ、そんな行為はアインハルトが嫌がるだらうし、俺達はまだちつがくせいだぞ! ? 確かにミシドでの就業年齢と結婚適齢が低いからつて!」

「因みにこのSSS内での結婚適齢は男女とも十代後半だ!」

だけど1週間の間で感じたのは、やっぱりアンサー一トーカーってマジチート。

霸王流、現代では完全に失われて、アインハルトでさえもまだまだ本当に効率の良い鍛錬方法は確立できなかったのに、それをあつさりと非常に効率の良い鍛錬メニューの答えを出してきたんだしな。

………… 管理局辺りにレアスキルとして認定されたりしないよな？ しないよね？ しないだろうな。

こればっかりは他の能力とは違つて、話さない限りバレないだろうし、大丈夫だなー！うんー！

これをフラグと感じた俺は………… 疲れているんだろうか？

そんなこんながあつて、練習試合当日の今日。  
俺はアインハルトと校門で待ち合わせて、約束の場所へと向かつていいく。

「んで、自信の程はどうだ？」

「ダンが霸王流にとつて一番良いメニューを考案してくれたんです、絶対に勝ちます」

「そうかい」

「はい」

問い合わせる俺に自信満々と言いつ様子で答えてくるアインハルト、なんかバトルジャンキーというか、そんな気質が最近見え始めたのは、気のせいと思いたい。

でも、彼女の自信も尤もだ。

1週間前は確かにかなりのレベルで纏まっていたが、動きに不安定さを見せていたのだ。

それがかなり改善されて見えなくなってきた上に、彼女自身の体力もダンチになっているんだ。

これで負けたら、ヴィヴィオちゃんの才能は、某野菜人並みのものだろう。

だけど俺は彼女の才能はそれくらいあるんじやね？ とも考える。彼女の母親の若い頃を考えたら、分る。

まあ、それもこれから分るかね。

それから始める一人の戦い、え、始まる前のやり取りはって?

アンサードーカーから自動的に原作と同じだつたといつ答えたが、強制的に還つて来たんだが……もしかしなくても、俺つて既に原作に関わってるの!?

そして、もう一つ気になるのが……

「くえ、キミがダン・ゴタンダくんだね、初めましてヴィヴィオのママの高野 なのはです」

「…… じ、じつも、ダン・ゴタンダです……」

何でここに魔王様がいんの!?

せつから背中が冷や汗でびっしょりだ! 流石は魔王だ、なんと  
このフレッシュヤー(注:ダンの勘違いです)なんだよー。

「ね、ダンくんって呼んで良いかな?」

「え、いい……」

「じゃあ、私の事はなのは、つて呼んでねー。」

「う、ううう……なのはさん……」

「？ 何か変な間がなかつた？」

「い、いいい、いや、氣のせこつすよー? なのはさんー。」

俺にあくまでフレンドリー、尚且つ麗しい微笑を浮かべて話しかけてくるなのは様。

一瞬、彼女の事を様付けで呼んでしまったが、ここで様をつけて呼んでしまつとかなりヤバい状況になるのは明白だ!

すぐに言葉を訂正する事で、その場を凌ぐ。

『あれば、照れているのか……?』

『どつちかつていうと、恐怖で震えているよひとも、感じひつすけど……』

『あたしも、そう思ひうが…… あの一人、会つた事なんてあつたか?

『会つた事すらないと思ひますが……』

『まあか、なのはさんが小わこあの子ヒトカラマを……』

なんてヒソヒソと言つてゐるギャラリーの皆様方だが、前世でのこのお方の容赦のなさを知つてゐる俺としては、失礼に当たらない対応をするので精一杯だ！？

え、アインハルトの変身シーンで田潰しをされなかつたかだつて？ 現実には丸っこい球体の中で変身して、それがガラスが割れるようになってるんだよ。

別に裸の女性の姿が見れるわけじゃないんだよ？ まあ実際に見れるとしても、ボインと言えるスバルさんや美なティアナさんにノーヴェさん達ならともかく、ペったこなヴィヴィオちゃんとアインハルトの裸見ても何も感じる事はない

「へんぶろつふん！…！」

「だ、大丈夫ダンくん！？」

そんなことを考えていた俺の顔面に、二人分のショーターが直撃する。

そのまま重力に抗いきれずに後ろに倒れる俺、驚愕の表情を浮かべて俺を心配するなさんの表情が印象的だつた。

だけど、一つ言いたい…… 青と白の水玉つか…… 大人のはやっぱり素晴らしいです。

なんて考えた瞬間に、アインハルトの一撃が更に集中したのは言うまでもない。

それから意識を失つてゐるらしい俺は、何か温かくて柔らかいもののに寝かされていることが分る。

俺の右側はあつたかい壁？ 見たいだけ柔らかくて良い匂いがする。

俺は無意識でそつちへと顔を向けて、体を寄せていぐ。

『ちよ…… なにー…… つてゐんドー…… ! ! !』

『まあまあ…… アイ…… ち…… ダ…… は氣絶……』

いい匂いとあつたかくてやーうかい壁、それに包まれて俺は幸せな気持ちを存分に感じていた。

「いい加減に起きて下さこ……」といふか、起きてこらでしょ！」  
「ダン！――！」

۱۰۷

声を荒げるアインハルト、こんな彼女の声にどうしてか逆らえない俺は、素直に体を起しそうとする。

だけど考えて欲しい、俺は今、体全体を右側に向けて寝ているのだ、その状態で無理矢理体を起こそうとすればどうなるか。

賢明といふか、普通の皆なら分るよねー?

「ハサウエイ...」

「こ、これは少なく見ても、D！ブルウアアア！-！-！」

へと打ち上げられた。

きりもみ回転で打ち上げられる俺は、胸を押えて無茶苦茶萌える表情と体勢をしているなのはさんと、その彼女に頭を下げて謝るア

インハルトを見ながら。

「ぶべらぶつーーー。」

見事な車田落ちと犬神家状態を地面で披露するのだった。  
その後はギャラリーの皆様方に救助されて、AINNHALTが氣絶  
しているヴィヴィオちゃんに自己紹介するなんていうイベントがあ  
つたんだが。

「痛いでーす、ティアナさん、スバルさん」

「全くしょうがないといつか、なんと言つかよねえ……」

「よしよし、ダンくん（ギン姉いたら大喜びで、この子を抱きしめ  
てただろうね）」

なんていう感じで彼女達に甘えているのだった。

こういう時つて年下で、幼いって便利だね！

大人つて言うか、高校生にでもなれば間違いなく犯罪だしね ！

## 第7話 エーと、俺って詰んだのかなあ？ いやまだ、まだ終わるよ！な

まだ魔王様とのフラグは構築されていませんし、模擬戦での戦闘のフラグも構築するはずだったのに……

どうしてこうなった？

と云いたい作者です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3062z/>

---

vividって何だろう？

2011年12月16日22時40分発行